
蘇る戦争の亡霊

武者丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蘇る戦争の亡霊

【Nコード】

N7330Y

【作者名】

武者丸

【あらすじ】

インフィニットストラトス。その兵器の登場により世界は急速に女尊男卑の歪んだ世界になってしまった。だが、そんな世の中を、そして何よりISとその開発者を誰よりも怨む男が居た。故に彼は、否彼等は立ち上がる。罰を与えるその為に。

この作品はかなり原作アンチ要素が強いです。また、作者は可愛い女の子を書けないのでハーレムどころか恋愛も期待しないで下さ

61

プロローグ（前書き）

処女作になります。若輩者でありますがよろしくお願いいたします。かなり不定期な更新になると思われまのでご了承頂きたく願います。

また、この作品ではIS発表と白騎士事件、そして簿の転校はほぼ同時にさせてあります。なので開発は六年前とさせてあります

プロローグ

IS（インフィニット・ストラトス）。六年前に開発されたそれにより、世界情勢は一変してしまった。

現行兵器を超えた圧倒的な戦闘力を持つそれは女性にしか扱えるものではなく、僅か4百余りの機体しかないのにも係わらず、「男女が戦争したら三日も持たず男が負ける」と言われるまでになっしまった。

世に言う女尊男卑の始まりである。

だが、果たしてそうなのだろうか？戦争とはそのような単純なものなのであるのか？

かつて戦争を経験した者達は疑問を抱く。

もはや戦後という言葉も消えかけている中で、生き残った彼等は思う。

「そんな短期間で済むものであったら、どれほど良かったものか」多くの咎人を生み、禁忌へと触れる行為があっけないほど平然と行われたあの地獄はそんな単純なものである筈がないと彼等は語る。そして思うのだ。人に其処までの驕りを生ませるものがこの世にあつて良いものなのかと。生まれてはならないものではなかったのかと。存在そのものが罪なのではないかと。

「……………そして「罪」には必ず「罰」が与えられるべきではないかと……………」

そう、罪は必ず罰されなければならない。そして彼等の想いを代弁するかのごとく怒りの拳は振り上げられる。地獄の底から蘇った戦争の亡霊と、彼と同じ名をした少年の血族によって……………。

第一話 蘇る不死身の兵士（前書き）

次の話から一旦過去に戻ります。

なのでこの戦いの続きは後程という事になります。

第一話 蘇る不死身の兵士

「四基だけではありませんのよ！」
「ドガガガッ！ー！」

不意打ちで撃たれたミサイルが一夏を襲う。慌てて回避行動を取るがまるで獲物を狙う蛇のごとく執拗に追いつがるミサイルを初心者の一夏が振りきれぬ筈もない。

着弾。全てのミサイルが牙を振るい爆煙が辺り一面を覆い隠す。その光景に誰もがセシリアの勝利を確信した。――唯一人を除いて。

「ふん、機体に救われたな。馬鹿者めが」

彼女、織斑千冬という言葉が終わると同時に煙が晴れる。其処には今までとは全く違う純白の一夏の姿があった。

「まさか・・・一次移行！？貴方、今まで初期設定の機体で戦っていたってどういうの！？」

驚愕するセシリア。いや、彼女だけではない。アリーナの全員が驚いている。だが一夏はそれには反応しない。俯いたまま、否、まるでこみ上げる何かを堪えるかのように肩が震えている。

それを見た筈に悪寒が走った。あれは、あの時の彼だと。この一週間の特訓の最後の日、彼と最後に試合する前になげなくーそう、少なくとも彼女にとっては本当に何気なくー聞かれた質問に答えた後の彼と同じだと。

「……………ああ、ここからが本当の戦いだ……………」

意外なほど静かな声で一夏が呟く。その言葉と同時に手にしていたブレードが展開される。

雪片式型 自らのシールドエネルギーを消費する代わりに相手のシールドを切り裂く諸刃の剣

次の瞬間にはそれを片手に突っ込んで行くと誰もが考えた瞬間

――ミシリ！――

鈍く、不快な音が辺りに木霊した。その音にセシリアは何の音かと怪訝に思うが、音の後に目に飛び込んで来た光景に我が目を疑った。何故なら猪突猛進に突っ込むものと思われた一夏は未だに静かに立ち、その右手に握られていた雪片式型の柄が彼の手の中で

――粉々に砕けていたのだから――

「あ…貴方一体何を考えてますの！？自分で武器を壊すなん…いえ、そもそも如何して破壊できるので すか!？」

セシリアの反応は最もだろう。初期設定で戦っていたというだけでも驚愕なのにせっかく手に入った武器を自らの手で破壊したのだ。それも素手で。

確かにISにパワーアシスト機能は存在する為常人よりも優れた勢力を発揮できる。だが少なくともそれに使われる以上、武器もまた頑強に作られている。一夏がした事は言わば生身で真剣の柄を握り潰したようなもの。彼女の驚愕も無理も無い。その問いによつやく一夏は顔を上げる。だがそれを目にしたセシリアは恐怖した。いや、彼女だけではない。箒も、アリーナの女生徒も、そして肉親でありかつてブリュンヒルデと恐れられた千冬までが恐怖に震え上がった。何故なら其処にあるのはついさっきまで戦っていた戦闘初心者頼りない顔ではなく

「言っただろう…本当の戦いはこれからだと、そう、茶番劇は終わりだと!！」

「――まるで逆鱗に触れた龍の如く、激しい怒りの炎を瞳に燈し、地獄の鬼もかくやと言つほどの恐ろしい表情をした顔があつたのだから――」

「セシリア・オルコット。俺はお前に言つた筈だ…専用機乗りつてのはそんなに偉いのかと。」

「な……貴方今更何を言つてい「ガシィ！」！？何をしていますの！？」

一夏の言葉に自尊心を刺激されたセシリアは思わず、恐怖も忘れて反論するがその言葉を遮るように更に驚愕すべき行動を彼はする。自分…白式の背後に手を回し、ISの心臓部そのものであるコアのある部分に先ほど恐ろしい握力を見せ付けた手を乗せ、否、掴んでいる。既に手の周囲を中心に亀裂が広がっておりミシミシと金属の軋む不快な音が辺りに響く。まるで白式の悲鳴のように

・・・

「言つただろ……専用機乗り如きがそんなに偉いのかと!!」
「メリメリッ！グシャア!!――」

その言葉と同時に装甲が割け、中から黒い球状のモノ…コアが掴みだされる。それと同時に一夏、否、白式が力を失い落下してゆく。

「勝者、セシリア・オルコット」

百式のエネルギーが無くなった事を感知し、無機質な合成音声彼女女の勝利をつげる。

だが、それは、

「「一夏!?!」」

「キヤアアアッ!!?!?!?!?!」

「織斑君が死んじやう!!?」
女達の悲鳴に遮られ誰にも届く事がなかった。無理もない。ちょっとした高層ビル並みの高さから人が自由落下―しかも機能停止して鉄屑同然のISを纏った―
してくるのだ。数瞬後に地面に広がるであろう血と肉の花、ミンチになった死体を想像し誰もがパニツクに陥る。
だが

「ハアツ・・・タア!!!!」
「・・・え・・・?」「」「」

裂迫の気合とともに白式が脱ぎ捨てられる。いや、それだけではない見れば何時の間になっていたのか彼の両手両足にパワーリストとアングル、更にはご丁寧にパワーチェストまでがつけてあったのだ。それ等を素早く取り外すと地面に向かって周りに飛び散る白式のパーツに向かって拳を振るっていく。その度にまるでガラス細工の様にパーツが粉々になっていく。

「ドゴオ!!バキン!グシャア!!」そのたびに耳障りな破壊音が辺りに響く。正に白式の真正正銘の断末魔の叫びが辺りに響く。
余りの光景に誰もが目を疑う中

「ドゴン!ドドゴン!!ドッゴオオン!!!!ドゴゴゴゴゴ!!!!!!」
「キヤアア!?!」

凄まじい轟音とともにアリーナに激しい揺れが襲い掛かる。この上大地震でもおこったのかと皆が恐怖する中ゆっくりと揺れは沈静化して行く。その事に安堵し始めている中、ふとある女生徒がグラウンドを見て震え出し、それを心配した友人が駆け寄る。

「ちょっと、大丈夫?」

「あ……あ……アレ……!!!!見て!!!!」

「アレってな……!?!」

彼女の震える指先の先を見れば幾つもの巨大なクレーターが地面を抉っている。そしてその一つを中心に小さく見えるものを見たとき、彼女もまた恐怖に震えた。

あれはパワーリストだ。今落ちている彼がつけていたものだ。ISのパワーアシストシステムとはいえあんな馬鹿でかいクレーターを作るようなものをつけてホイホイ動かせる筈がない。いや、そもそも彼は何時からつけていた？態々決戦にそんなものをつけて行く筈がない。ならば考えられるのは普段…！？

「化物…化物だわ千冬様の弟にしたって限度があるわよ!？」

「というか本当に人間なの?!サイボーグだって言われた方が納得できるわ「ドリヤアアア!」!？」

突如響いた咆哮に目を向ければ一夏が丁度最後のパーツィー羽根のある胴体部分に蹴りを入れながらグラウンドに落下してきた所であった。再び轟音と共に大地が震えその衝撃に必死に耐える。

やがて振動が収まった時、グラウンドには巨大なクレーターができており、その中心には白式の残骸を踏み付け仁王立ちし、遙か上空のセシリアを睨み上げる一夏の姿があった。

「セシリア・オルコット」

「ッ!!?!?な…んで…すの…?」

言葉尻が、いや全身から震えが収まらない。第三者が見ても今までの行いは常軌を逸し過ぎているのだ

当事者の恐怖は押しして測るべきであろう。むしろ口を利けただけでも僥倖と言すべきか。

そんな彼女を尻目に一夏はゆっくりと右腕をあげ、その手に握ったコアを掲げる。

「お前は言ったな。俺をISの事を知らぬ素人だと。ならばお前は知っているか。ISのコア、その正式名称を。そして知っているの

か？ISのコアを増やせない本当の理由を！」

「コアの…正式名称…？増やせない理由なら開発者の東博士がコアの開発を拒んだからではありませんの…？」

「そうだろう。お前は、いやお前達IS乗りは何も知らない。何も見えてない。

白騎士事件の真相も疑わずにその力に魅せられ、圧倒的力で全てをねじ伏せられると。だがな。戦争つてのはそんな簡単なものじゃない。お爺ちゃんによく聞かされたよ。爺ちゃんは戦争に行つてはいない。だが爺ちゃんの兄弟は戦争の名の下に生まれ、その罪を一心に背負い二度死んだ。爺ちゃんだけじゃない。戦争で地獄を見たのはどこだって同じだ。だから爺ちゃんは誓つた。もう二度と戦争を起してはならないと。この荒涼とした命のない大地を広げてはならぬと。そして平和になった世の中で兄弟に三度目の命を与え、今度こそ胸を張つて平和の為に生きていこうと。

その為に爺ちゃんは研究を始めた。兄弟を蘇らせる為、そして父が夢見た新エネルギーを別の形で生み出し平和利用する為の研究、太陽エンジンの開発を」

「太陽…エンジン？」

「ああ、太陽光発電の様に太陽から無限のエネルギーを得るシステムだ。

兄弟にはバギウムって新元素を使った動力システムがあった。でも、ソイツは太陽爆弾と呼ばれる爆発すれば地球を死の星にする最終兵器でな。そんなものを兄弟にまたつける訳には行かなかった。

それにバギウムにしても掘りつくして既がない。もし無公害なエネルギーを見つけても、掘りつくしたバギウムの様に簡単に枯渇させては意味が無い。そこで爺ちゃんはふと気が付いた。太陽爆弾

…その中にある太陽の文字に。生命と力の象徴。この太陽系で最も強大無比力を持ち、少なくとも後数十億年は力を溢れさせているそれこそが、正にうってつけではないかと。そして爺ちゃんの研究を始めた。もう二度と兄弟に地獄を見せない願いを込め、その動力源に太陽エンジンと名をつけて」

「ですがそんな無限のエネルギーなど夢物語も良いところですよ！」

「その通りさ。だが爺ちゃんはそれを諦めなかった。やがて結婚し子を授かると子供は誰に強制されるでもなく、その研究を手伝いだした。その夢に惹かれて。やがてその子供も成長し孫が生まれる頃になり、やっと予定より低出力とはいえ、かなりの出力を持った試作型が誕生した。一先ずはそれを先行型として量産する事にした。小型で超出力、無公害のそれは丁度世で騒がれている環境問題対策にうってつけたと。自分達が作ったものが平和の為に役立つのだが、そんな願いをあざ笑うかのようにその試作型は盗まれた。ご丁寧にふざけた制限設定をつけられ、爺ちゃん達が最も嫌った戦争の道具として！！」

「盗まれた？試作品が？一体なにを…！？あ、貴方それは本気で言ってますの！？」

一夏の言わんとする事に気づいたセシリアは驚愕した。何故なら一夏の言わんとしていることは

「そう、その通り。ISの根幹たるコア技術の開発者は束なんて鬼女じゃない。真の開発者は・・・」

ISという兵器の大前提を覆す

「我が祖父金田正太郎と、その息子夫婦・・・俺の両親だ！！だからアイツはコアを作らない、いや作れない！アイツはシステムをソフトを弄るのは確かに天才。だからコアの設定を弄くっただけだ。ハードであるコアの製造は不可能！！」

衝撃の事実なのだから。

「白騎士事件。あのせいでせっかく完成した量産太陽エンジンは散り散りになった。いやそれどころか平和を願って作られたのに、それとは最もかけ離れた戦争の道具にされ、あまつさえ女にしか扱えないというふざけた設定の性で女尊男卑という歪んだ世界を生み出してしまった。」

「……今でも目に焼きついてるよ。ひい爺ちゃんと兄弟の名を叫びながら悔し涙を流し、詫びる爺ちゃんと、茫然自失となった両親を。自分達に幼いながらも協力してくれたと思った少女に裏切られ、自分達が大罪を犯してしまったのだと後悔してる様を」

もはや今日何度目と数え切れない驚愕にセシリアは打ちのめされる。加えて親と言う言葉が彼女の胸を抉った。何故なら彼女も親の遺産を守らんと必死に努力してきたのだから

「聞こえてるんだろう！篠ノ之 束！！そして織斑千冬！！」

「……夏……」

一夏が吼える。天をも轟かす程の怒りを孕んだ声で。それを耳にした千冬は信じられない程か細い呟きをする。たった一人の肉親に、大切な家族と置いていた少年に憎しみをぶつけられる姿は鬼教師と呼ばれているとは思えない程、小さく、目には生気が消えうせていた。

「聞いての通りだ！俺は貴様等を許さない！！爺ちゃんと父さん母さんを泣かせた貴様等を！！！！」

その迫力に皆が圧倒される。野生の獣のごとく荒々しい気迫に当てられ誰もが身動きがとれない。

「だが一つだけ、そう、たった一つだけ貴様等に感謝をする事がある。」

「え・・・？」

その言葉に千冬の目に僅かだが気が戻る。もしかしたらまだ姉弟に戻るのではないかと淡い希望と共に「勿論それはすぐ絶望へと変わるのだが――」

「貴様等の行いで悲しみにくれた爺ちゃん達、そしてそれをみて異常なまでの怒りに震えた俺に反応したんだ。たった一つ。実験継続の為に残しておいたコアが。その時のデータのおかげで滞ってた研究が全て進み、六年の歳月を経て当初以上の性能で完成したのさ。」

「…真正正銘、無限の力を持つ太陽エンジンとその力で蘇った爺ちゃん兄弟…もう一人の正太郎が！！！」

言葉と共に一夏は古臭いデザインの操縦器を取り出す。それと同時に辺りに轟音が響き渡る。だが、その轟音にまぎり途切れ途切れに獣の吼えるような声が聞こえてくる

「さあ、見るが良い！！！」

ガ・・・オ・・・途切れ途切れの咆哮が段々とはつきりしてくる。

「戦争の名の下に生み出され、戦争の名の元に二度死んだ者を！！」
アリーナ上空に青い点が見えそれがどんどん大きくなっていく。

「我が祖父と同じ名を持つ家族を！！！」

アリーナに巡らされたシールドをまるで紙のように引き裂き大地に降り立つ

その名を！

「不死身の兵士と呼ばれた彼を！」

その名を！

「日本の礎となり水底深く沈んだ彼を！」
その名を！

「最後の最後まで兄弟を守ろうとした漢を！」
その名を！

「戦争の罪を一身にその身に背負った漢を！」
その名を！

「鉄人28号…またの名を正太郎…！」
・
・

金田一夏は吼える。この歪んだ世界を壊そうと。そして思う。これこそが自分達の贖罪であり、断罪でもあるのだと。その彼の熱き血潮を受け、鉄人も吼える。血は流れずともこの身体には同じ想いが、魂が籠っているのだと。ゆえに彼もまた吼えるのだ。

ガオオオオオオオオオオ！！！！

自分の魂の命ずるままに。

第一話 蘇る不死身の兵士（後書き）

鉄人登場。しかしいくら今川とはいえ一夏を超人にしすぎたかも
唯でさえ超人濃度低めな鉄人なのに

一応全世界に喧嘩を売る上、鉄人のシステム上操縦者狙われたら終
わりという

事で強化したのですけどなんか書いてる内にドンドン強くなっちゃ
ったんですよね

しかし文章で動きを表現するのがここまで難しいとは参りました。

やたら説明臭くなってますし。

次回からは白騎士以前まで遡って生い立ちを明らかにしていこうと
思ってます。

何故一夏が両親と面識がはっきりしてるのかはその時に。

第二話 親と子（前書き）

この話だと一夏も千冬も両親には捨てられてません。
なので忙しい親という形に致しました。

第二話 親と子

―時は10年程前まで遡る。―

俺の両親は、工場に勤める傍ら発明・研究を行う。科学者だった。本人達曰く、自分が研究をやりたいからやるだけで言ってみれば趣味であり、だからその為と生活費を稼ぐ為に働いていると話してくれた。

そんな訳で忙しい両親達だったが、休みの日は極力時間を取って自分達と遊んでくれたし

近くに両親の友人とその娘である篠ノ之親子が遊び相手になってくれたので寂しさを感じた事はなかった。

―ただ、どうしても留守にしがちな事もあってか千冬：姉さんは「自分が一夏を守らなければならぬ」と思っていたらしいが―

俺は毎日箒と遊んだり剣道の稽古をして、偶の休みには爺ちゃんの所へ遊びに行ったりもした。

遊びに行くと爺ちゃんはいつも喜んでくれた。

なんでそんなに喜んでくれるのかと聞いた俺に爺ちゃんは笑って、でもどこか真剣な表情で言った。

未来を生む子供は宝だと。そして自分の子がまた新たな

未来を作っていく様が楽しみでしょうがないと。

当時はよく解らなかったが、なんとなく

「ボクたちが、おとなになるのがたのしみなの？」

と聞くと

「ああ、楽しみさ。将来どんな事をするのか、どんな未来や夢を現実させるか」

と応えてくれた。子供ながらに爺ちゃんが期待してくれてくれたのが解り嬉しかった。

だから、

「ゆめ？じゃあおとなになったらじいちゃんがおったまげるくらいすごいことしちゃう！」

「はは、おったまげるか！それは楽しみじゃのう。生きる楽しみが増えるわい！」

「じゃあぜったいながいきしてよね！！ボクが大人になってでっかいことやって、それでけっこんして

こどもができたら、またおなじおはなししてあげてよ！」

「一夏の子供か！ひ孫抱くとはどうやら百まで死ねそうにないな。ハハッ！」

「ぜっただよ！ぜったいおはなししてよ！」

「ああ、約束しようの。ほら」

子供ながらに将来に凄い事して、大好きな爺ちゃんをびっくりさせようと思いつながらその誓い…指きりを爺ちゃんとしたのだった。

――将来、それが意外な形で果たされるとは思いもせず。――

ある日、偶々篤達が用事があつて遊べず公園で他の子供に混じって遊んでいた時、ふと視線を感じた。なんとなく見てみると白衣の薄ぼんやりした初老の男が優しげに自分を見て微笑んでいたのだ。

どこか見覚えのあるその男の事が気になった俺はふと近づいて行く

とゆっくりと男は遠ざかる。いや、遠ざかっているというより案内しているようにゆっくりと歩んで行く。

子供の誘拐は好ましい事でもないが割と多い事であり、当然両親も自分達に「知らない人に付いて行っってはならない」

と耳にタコが出来るくらい言っただし、自分も誘拐を恐れそれを十分承知していた。

なのにその男に付いて行く事に全く恐怖を感じなかった。漠然とけれどもハッキリとした感覚があったのだ

「この人は危険じゃないと」

どれほど歩いたのか解らない。ふと気づくと俺はどこかの研究所に居て、男は消えた居た。さすがに見覚えのない場所に来て不安になっっていると足音が近づいてきた。思わず身構えたがその足音の主を見て安堵した。

その代わり相手は大いに驚いていた。何故なら相手は自分の両親で、この場所は「危険だから入ってはならぬ」と言い聞かせられていた祖父や両親の研究所なのだから。

一体どうやってと聞かれたので「なんか白い博士みたいな服着たおじさんについて来た」と言ったが両親は首を捻った。

今日は来客はお前だけだと。他の誰も来ては居ないと。代わって怒られた。偶々自分達の所だったとはいえ本当に連れ去られる事もあるのだと。そうなら命の危険もあると。

「でも父さん母さん、あの人悪い人そうには見えなかったし、全然危険な感じしなかったし、それに…」

「でもモストもない！今回は良かったものの殺される可能性だっ

「爺ちゃんに似てたし、なんとなく。家族みたいな感じだった。」

「な!？」

自分の一言に両親は大層驚いたようであった。同時に何かに気づいたようでまさか、とか、いやそんな筈はとかしきりにブツブツ呟いている。どうしたものかと思っていると爺ちゃんが来た。何か考え事をしてるような顔で

「一夏、その男はこんな顔じゃなかったかの。」

そう言っただけ古い白黒写真を見せる。随分年季が入っていたがそれでも人物像は識別できた。その中で長い鼻をした小太り気味初老の男性を

指差している。なるほど、確かにそこに移っていたのは自分が付いていた男である。そうだ、と応えようと爺ちゃんがやはりいいいたげに

奇妙な表情をした。困ったような、それでいて嬉しいような表情を

「爺ちゃん、この人って一体誰なの？」

「わしの父さん、つまりお前にとっては曾爺ちゃんじゃ」

「え！？でも曾爺ちゃんは爺ちゃんの生まれる前に死んだんじゃないか？」

「いや、その通り。随分昔に死んだよ。でも、夢に出た事があつてのう。丁度千冬が生まれた頃じゃったか。」

父さんの他に昔世話になった人たちが次々に立って孫が出来た祝いと、そして警告…気をつけるよう注意したんじゃない」

「注意？」

「ああ、孫には絶対に研究内容も研究所の場所も教えてもならんどもし教えたとしても恐ろしい事がおきてしまつと」

その言葉に俺は戦慄を覚えた。何故なら自分はその恐ろしい事の条件を既に満たして居るのだから。もしやアレは曾祖父の振りをして自分を陥れた悪魔じゃないのかと本気で思う。そして恐怖する。ど

んな恐ろしい事が起こってしまうのかと。

「じゃ僕ここにきちゃあ…」

「慌てるな。これは千冬の時と言っておろうが。まだ続きがある。」
「続き？」

「そう、続きじゃ。一夏が生まれた時にも祝いに夢に出てきてな。

今度の孫は大丈夫だと、お前達の夢を話しても大丈夫だと

但し自分からは話してはならない。お前が此処に来た時に話してやれと。千冬に秘密でな」

「千冬姉に秘密？大丈夫なのは良かったけどなんで？」

「多分もしこれを千冬が見たら間違いなく歪んだ道へ進んでしまうからじゃろうの。あの子は自分や力に溺れやすい面がある

からもしアレを見たら力に溺れてしまいかもしれんと…。」

「力に溺れる…？どういうこと？泳ぐのでもないのに？」

「すまんすまん。一夏には難しかったかの。簡単に言えばロクでもない大人に育ってしまうということじゃ。孫をロクデナシになどしたくないからな」

「ふうん…」

「さあ、では見せてあげようか。ワシのこの50年間、息子をも巻き込んだ夢の形を…来なさい一夏」

そう告げると爺ちゃんは俺の手を握って歩き出した。コツコツと足音が響く。やがて電気の光とは違う、暖かな、けれども力強い光が見えてくる。

近づくtoyagaて何かの機械の上にある小さな黒い球からそれが出ているのだと解る。

「爺ちゃん。あれ何？」

「見えてきたようじゃの。そう、あれこそが太陽エンジン！！太陽から無限の力を引き出す夢の動力源じゃ！！」

「でもそれ太陽電池と何が違うの？それにあれあんまり力が無いって言うけど」

「舐めるでない。いくら実験段階とはいえあれの倍の出力は等に出せておる…本来の目標からすれば微々たるものじゃが」

「本来の目標って？」

「一つで一国の電気エネルギー全てを作れるほどじゃ」

「……………」

思わず絶句する。子供ながらにとんでもない話だと理解できる。でも同時に何故か心が惹かれた。夢物語のような事、でもそれを語る祖父と一緒に歩いて

居る両親の背中はどこか誇らしげで、頼もしく見えたから。そしてその夢も実現出来たらとても凄いと。

「でもそんな凄いもの作って一体どうするの？」

「昔は色々あつての。エネルギー問題がいつかは出てくるとおもってたな。それに新エネルギーは父さん…曾爺ちゃんも夢みたいなものだった。それをかなえて見たいと…」

まあ、一番の目的は彼、じゃな。」

その言葉と共に爺ちゃんはレバーを引く。すると下のほうから何かがせりあがってくる。黒く赤茶けた鉄の塊が。何かと思ったがその中に赤く輝く「眼」を見たとき

「ソレ」がなんの残骸なのか気づいた。

「じ、爺ちゃんこれってまさか…ロボット!？」

「その通り。太陽エンジンは彼の新たな心臓として開発したんじゃ。父さんが作った、ワシと同じ名を持つ兄弟…鉄人28号を」

「鉄人…28号？兄弟ってどういう事？」

その疑問に対し、爺ちゃんは丁寧に話してくれた。かつての戦争。それで一発逆転の為の無敵のロボット製造作戦があったと。その指

揮を執り、だけど戦争を最も嫌ったのが

父・・・金田博士だと。計画が難航する中自分の息子（つまりは祖父正太郎）が母子ともども戦死したと聞きその悲しみを埋める様に開発に没頭し、その28番目の機体に

生まれてくる子の為にと考えた名：正太郎と名づけ有り余らんばかりの愛情を注いだのだと。

だが、同じく開発に携わっていたビッグファイア博士の策略に会い、彼の身体にはとんでもないものが埋め込まれてしまった。

新元素、バギウムにより絶大な力を発揮し爆発すれば以後60年は地球を全生命が生存不可能な死の星にする禁断の兵器、太陽爆弾が埋め込まれたのだと。

その事に気づいた金田博士はわざと基地の場所を教え、鉄人と共に自らを葬った：筈であった。

そして戦死したと思われた子供、正太郎が10歳の時、ちよつとした事件によつて彼は遙か地の底から蘇つてしまった。最初は上手くいかない爺ちゃんとの関係も次第に合い

かけがえの無い家族となった時、事件は起こる。再びビッグファイア博士の手によつて。

その解決には、完成した「バギウム」を搭載して本領発揮した鉄人が不可欠だった。でもそうなるといずれ爆発してしまう。それを防ぐ方法は溶鉱炉に溶かす事、

つまり完成と同時に彼の死を意味する事だった。追い込まれた状況の中遂に自らの手で兄弟を葬る事を爺ちゃんは決意した。いつかその罪を必ず償うと決めて。

その事件の最後、操縦機が壊れた時、鉄人が自分の方に向かってきた。そのとき自分を殺す気だと爺ちゃんは思った。彼にはその権利がある。それこそが

自分の罰なのだ。でも実際は彼は最後まで守ってくれた。灼熱の溶鉱炉からの燃える鉄からその身を持つて。偶然なのかもしれない。でもそう思わずには爺ちゃんは

いられなかつた。そして思った彼が生きると言つたら自分は生きて償おうと。もう彼のような悲劇を繰り返してはならないと

そして平和で、彼が兵器という悪魔の手先でなく、人々の幸せを作る正義の味方として大手を振って歩ける世の中になったら、今度こそ彼と家族として生きていこうと。

ゆえに決意したのだ。完全無公害で強力無比な無限のエネルギーの開発を。太陽爆弾という罪の塊ではなく日の下を大手に振って歩ける心臓を。

そう、太陽エンジンの開発を。

「爺ちゃんの…兄弟…。無敵のロボット」

「なあ。一夏。もし彼が蘇ったらどうしたい？」

「……遊びたい。」

「何？」

「だって爺ちゃんの兄弟なんでしょ？だったら一緒に遊びたいよ！それに家族なんでしょ！？」

「ハハ！そうか。遊びたいか！！そうかそうか！！成る程、父さん達の言葉の意味が、そして態々連れてきた意味が解った！！

一夏がこういふ奴だからか！！」

そう言つて爺ちゃんは大声で笑い始める。両親もそれに釣られて大笑いしている。

首を捻る中父さんが俺に問いかける。

「なあ、一夏。鉄人は蘇つた時最強の力を持つだろう。それで世界をどうにかしたいと思うか？」

「やだよ。それじゃ爺ちゃんが蘇らせた意味無いじゃん。第一それじゃ爺ちゃんが悲しむし、本当に強い奴は象さんみたいに優しいもん。力で無理やりするのっていじめっ子じゃん」

「…私達は良い息子を持ったわ。本当に。貴方がそういう子だった

「からこそ、義爺様はここに貴方を連れて来たのね。」

「昔な、お前と同じくらいの時千冬に最強の力を持ったらどうするか聞いた事があっての。そうしたらあの子は王様に成りたいと。世界を自分の思い通りにしたいと言っただけ。」

「家族はどうするの？って聞いたらあの子勿論守るよそんな凄い力が手に入ったんだしってね…その応え聞いたときは内心残念だったわ。」

「お母さん？王様は僕もどうかと思うけど家族を守るのはいけないことじゃないんじゃないの？」

俺は疑問を口にした。爺ちゃんが話した王様は子供にしてもさすがにどうかと思っただが「家族を守る」と言った母さんが暗い顔をしてたのが疑問だった。

少なくともそれは立派な事だと思っし、恐らくやがて生まれてくる家族を姉として守るという意味だと。それは姉としてむしろ誇る事ではないかと？

「一夏、もし友達が、篝ちゃんが虐められてたらどうする？お前は篝ちゃんより強いみたいだけど相手がもっと強くて敵いそうになかったら？」

「怖いけど、でも助けると思う。友達が虐められるのなんて見るのは嫌だし！」

「ボロボロで怪我だらけになって負けるかもしれないぞ？」

「でも嫌なもんは嫌だ！そんなのどうだって良いからとにかく助ける！！」

「……馬鹿な子ね。でもそれが聞きたかったわ」

「？それってどういうこと？」

「良く覚えて置きなさい一夏。『人を助ける時は馬鹿になって助ける』って言うてね。助けたいと思ったらそれで充分助ける理由にな

るの。自分の立場がどうかか
相手がどうだとか見返りとか関係なくね。助けたいから助けた。それ
で良いの。」

「……似たような話を千冬にしたら、あいつは屁理屈つけて結局無
視を決め込むみたいな事を言ってるな。その後でその話をしたらあ
の答えだ。つまりアイツは自分より

弱い奴には強気も強気だが、一旦自分より強い相手には尻尾を巻い
て逃げ出すって事だ。我が娘ながら恥ずかしい事に。勿論生き方と
しては無鉄砲は褒められたもの

じゃない。けど、壁に立ち向かおうともせず、力で全てを解決しよ
うとするあの子には研究を教える訳にはいかなかった。知れば将来
暴君…悪い王様になってしまっからな。」

「……それがさっき言ってた力に溺れるって奴？」

「そうよ。勿論あの子はまだ子供だし、勿論私達だって大切な娘を
そんなものにする気はないわ。まあ、一度挫折を味わうなりすれば
良いんだけど…」

「家事は下手だがそれ以外は完璧超人だからなアイツは」

両親の言うように、千冬は家事こそ致命的だがそれ以外は超人的レ
ベルで優れており、挫折知らずの人生を今まで歩んでいた。勿論一
応相応の努力はしてるが

それでも打ちひしがれたり、悔しがったりするような出来事なくほ
ぼ思い通りに生きていた。恐らく彼女に挫折を叩き込むような事は
今後もしうそうないだろう。

「良いか、一夏。本当に強い奴は転ばない奴じゃない。転んでもす
ぐ立ち直る奴だ。百回転んだら千回起き上がるくらいなの。」

「数が合わないよ？」

「そついう気合だった事よ。さあ、もう今日は帰りましょう。そろ
そろ戻らないとあの子が心配するわよ？」

ふと近くにあつた時計を見るとなるほど、確かに5時近い。子供はそろそろ帰る時間だろう。帰り支度を始める両親を待っていた俺に爺ちゃんが声をかける。

「一夏。気が向いたらまた何時でもここに来て良いぞ」

「ホント？！でもいつも危ないって…」

「なに、ホントに危ない実験の時は来ないよう改めて言うし半分は千冬に知られないようにする為だからの。だから…」

「解った！千冬姉ちゃんには内緒だね！」

「その通り。だが、箒ちゃん達にも言つては駄目じゃぞ。」

笑みを浮かべながら爺ちゃんが俺の頭を撫でてくれる。その心地よさに任せているうちに両親が戻ってきた。両親について行くと妙な機械のある部屋に付き、それに

両親と乗る。

「熱き太陽に、無限の光と未来を託そう。いつか兄弟ともに暮らすその日の為に」

父がそう呟くと同時にバチバチと全身に静電気が走つたような妙な感覚があり、景色が一変していた。この景色は見覚えがある。爺ちゃんの家の倉庫だ。驚いて父に話すと

「こいつは転送装置さ。昔父さんが係わつた事件で縁があつてな。その人が死ぬときに譲り受けたものを改良したものだ。使うときはさっきの言葉が暗礁番号になつてる。

最も声でも区別してるから、もし合言葉がばれても大丈夫なんだけどな。ちなみに俺達の他に箒ちゃん家のオジサンオバサンも知ってるぞ。古い付き合いだったし」

「あれ？じゃあどうしてボクこれなの？」

「爺ちゃんが、いや爺ちゃん達がなにかやつたのかもな。なんせ死

んだ人間だ。この世の理なんて意味無いだろうさ」

「ようするにひい爺ちゃんがあの世パワーでなんとかしたってこと？」

「まあ、そういう事ね。さあ、帰りましょう。一夏、折角だから何かお菓子でも買っていく？」

「良いの?! やった!」

父さんと母さんに手をつながれながら帰って行く。

爺ちゃん達の夢を感じられて、そして自分よりいつも先を行っていた姉でも知らない秘密を知っているというちょっぴり優越感に浸って。

その後家に帰ると怪訝な顔した姉さんが出迎えてくれた。何故両親と一緒にいるのかと疑問に話す姉には帰り道偶然会ってどうせだから一緒に帰ったと告げる。

特に不自然ではなかったしお土産のお菓子で気を良くした姉はそれ以上追及しなかった。

その日の夕食は何故か何時もより美味しく感じた。良いことがあると御飯が進むというからもしかしたらそうだったのかも知れないこんな日が、いつまでも続けば良いと思った。

――しかし、その願いは虚しく壊される。両親達の願いも虚しく力に溺れた、自分が姉と慕った二人の人物によって――

第二話 親と子（後書き）

結構難産でした。

最初は一夏だけ面識ありにしようかと思いましたが、幾らなんでも不自然過ぎる

上無責任過ぎるといふ事でこつこつ形にしました

ちなみに力云々は白騎士事件等で感じた千冬への感想です。そんな事しでかすのが

誰だか解っていて自分の手で世界滅茶苦茶にしてるのにそのブツ壊したものを

を広める活動をしてる事に対してとかの。

大体あんた親友警戒してるがあんたも充分同罪だと。

しかし歳取った正太郎がなんだかオリキャラっぽくなってしまったのが残念。

やはり既存キャラに年齢取らせるのは難しいですわ

第三話 裏切りとパンドラの箱（前書き）

この章で一夏のは一つの区切りを迎えます

第三話 裏切りとパンドラの箱

ギリシヤ神話のパンドラの箱は、ありとあらゆる厄災が詰まっていた。それを

開けてしまったものは如何なる心境だったのだろうか？

自らの手でこの世に災いを招いた者の心境は

もし、あの時ああしていれば、もしあの時ああしなければ。

誰もが一度は考えることであろう。過去に戻ってやり直したいと、だが、気づいた時には全てが遅い。そう、遅すぎるのだ。

「東さんをこの研究所に？」

「ああ、彼女の才能は確かなものだ。少なくともコンピュータ関係、いや、システム関係にはな

父さん達はそっちの方はどうも余り詳しくはなくてね。」

そんな話が出たのは研究所に出入りするようになって二年程した頃であったか。いつもの

様に研究所に遊びに来ていると父さん達が神妙な顔をして話し合っていた。

何事かと訊ねると、どうやら最近行き詰まり感のある研究を見かねてか、父さんの古くからの親友である篠ノ之夫妻が

自分の娘である東を参加させてはどうかと持ちかけてきたらしい。

確かに父さん達はハード、それも駆動系等の機械的な

部分を専門に研究・開発を進めてきた。だからソフトウェアに関しては自然に疎くなってしまうのだ。勿論ある程度

基礎的な部分は解るが、詳しい部分は門外漢と言って良い。この研究所に入り浸る様になった当時に比べ、太陽エンジンも

また、随分高出力化が進んで来ていた。だがそれ故に問題も発生し

てきた。高出力化に際し、父さん達の力では制御が間に合わなくなつて来たのだ。それを見かねてどうやらその話を持ち出して来たらしい。

確かに彼女は天才だ。コンピュータ関連技術に限れば正しく「化物」である。最近はマネーゲームもしてゐるらしくやけにハブリも良い。今だ十代であるにも係わらず、もしかしたら曾爺ちゃん、戦争中の狂科学者達にも負けないかも知れない。その彼女の技術があれば確かに飛躍的に研究が進むだろう。

だが、彼女は千冬の親友である。彼女を通じて千冬に太陽エンジンの事がばれるのは何としても阻止しなければならない。

何より彼女自身にも問題がある。何故なら彼女は――

「でも、父さん。東さんは確かにそういうのは得意だけど、性格がちよつと……」

「解っている。あの子は自分の妹である篤ちゃん、それと友達であるお前達姉弟以外はどうなるうがしたこつちやない。親である柳韻達で

さえ、かろうじて認識できる程度……狭い世界に閉じこもつてるお前達以上の子供だつて事も。」

彼女、篠ノ之 束は皮肉な事に精神面の狂気さえ彼等に匹敵、いやある意味では圧倒していた。彼女は俺と姉さん、そして妹である篤には
心を開いており、年齢からは考えられない程子供染みた態度でスキンシップを取つたりしてくる。だが、それ以外の人物は冷たく対応する。

まるでゴミでも見るかの様に。篠ノ之夫妻もそれを矯正しようといれまで何度も努力をしてきた。ある時は公園に連れて行って馴染ませようと

したり、ある時はまた別の手を使つたりと。だが、束にかろうじて

「人である」と認識されている夫妻ではその努力もまったくの徒労に終わり、
そんな彼女の所業を見かねた一夏も幼いなりに彼女を矯正しようとしたのだが、普段は傾ける彼の言葉さえ
その時ばかりは馬耳東風と聞き流されるばかりで効果はなかった。
そんな余りに「幼い」彼女をこの件に係わらせるのは、下手をすれば獅子身中の虫を自ら呼び込む事に他ならない。
幾ら研究が行き詰つてると行っても余りに危険な博打である。最終手段だとしても危険要素の方が大きすぎるのだ。

「解っているならどうして？そんなに研究行き詰つてるの？」

「確かにそれもあるんだが、コイツはあの子を成長させる為でもあるんだ。あの子があそこまで歪んでいるのはその才能を生かせる場がなく腐つてるからじゃないかと。」

「ならばその才を存分に發揮して熱中できる事があればもしかしたら…てな。どうやらあっちも行き詰まりらしくてならいっそ協力してはどうかと。」

「あのくらの年齢なら自分の限界に挑戦したくもなるしな。…それにこのままほつとく方が危険って事もある。」

「ほつとく方が危険？それって？」

「…最近、あの子が地下室に籠つてるらしい。何か企んでいるのかも」と

「地下室に？」

「どうやら、お前が此処に来てるのを感じいたらしくてな。科学者の感で。お前が此処に夢中なのが面白くないらしい。」

「幸い場所はバレては居ないんだが、お前の気を引こうと何かをする可能性もあるようだな。洒落にならん事をしでかすかもしれん」

父の告げた悪い予感に怖気が走った。東は子供の残酷さと大人の残

虐さが同居したような人物だ。鼻歌混じりにそこら辺の動物を実験台に何かをするのが

やすやすと眼に浮かぶ。確かにこのままほって置くのもそれはそれで危険な可能性がある。だが、知られたら知られたでとてつもない惨劇を引き起こす可能性もある。

先ほど父さん達が神妙な顔をしてた事に合点がいった。これほどデリケートな問題である。加えて彼等は俺の親類だけあってまだかろうじて彼女に「人間」と

認識されてるレベルである。彼等の言う事を聞くとは到底思えないのだ。もしもの時のブレーキ役が居ない。

重い沈黙が辺りを包む。ふと、そんな中俺は気がついた。イチかバチではあるが、彼女を従わせる方法に。

「……僕がお願いすれば良いんじゃないかな。変な事しちゃ駄目だつて。絶対千冬姉には内緒だつて。」

「確かにそれは俺達も考えては見たが、確立は二分の一が良いところだ。お前のいう事なら聞くかもしれないがいつもお前が居るわけじゃないし

それにそも今までそういうのはあんま聞かなかつたんだろ？」

「大丈夫。断つたら絶交だつて言うから。実際そんな事すれば本気でするつもりだし」

さすがに其処まで言えば彼女も首を縦に振らざるを得ないだろう。

何せ彼女の世界は自分以外たったの三人しか居ないのだ。一人欠けるのは耐えられない筈である。

今まではさすがに使うのが躊躇われたがもはやかまっている暇は無い。それにその言葉に嘘は無かった。自分は爺ちゃんや両親が楽しみに研究している様を見るのが何より楽

しみなのだ。それを土足で踏みにじるような輩と馴れ合う気などま

つたくない。俺の決意を感じたのか父さん達はしばらく沈黙する。静寂が辺りを支配する。二時間、三時間、いやもしかしたら実は一分も立ってないのかもしれない。だが俺には永遠の沈黙の様に長く感じた。

「…良いのか、本当に？」

「良いよ。男に二言は無いしね。」

「解った。あいつ等にも話してみるとしよう」

やがてその沈黙を破って父さんが尋ねる。その問いに対して俺は肯定の意を示した。それにこれは自分がこの研究にある意味協力出来る事なのだ。爺ちゃん達の手伝いが出来ると思うと俄然やる気も沸いてくる。俺の瞳に迷いが無い事と決意を感じ、父さんも腹を括ったようであった。

「別に、良いよ？面白そうだし」

「……本当か？本当に良いのか？」

「五月蠅いなあ…良いっていつてるじゃん」

結論で言えば、彼女は意外にも二つ返事で快諾した。更には自分が脅すまでもなく「研究所では爺ちゃん達の指示に従う」という、普段の彼女からしたら絶対に受け付けないだろう内容も不承不承ながら了承したのだ。好意的なのに越した事は無いが余りに上手く出来過ぎた状況にむしろ不安さえ覚えた俺が変な事をしないように念を押すと

「ダイジョーブダイジョーブ！この私がいっくんが悲しむような事する筈ないって！大船に乗った気で居なさい！！」

と実に良い笑顔で返された。そして彼女の研究への参加は始まった。性格に破綻があると言っても実力自体は正しく天才の面目躍如とばかりにコアの制御プログラムを易々と

組み上げた。それだけでなくこの研究所への移動に使う転送装置に目をつけ、その原理を応用して物質をデータ化し保存する方法を開発した。更にそれをコアに応用し緊急時

最低限の応急処置が出来る様な自己修復機能を提言し、共同開発にてその機能を実現する事となった。そんな事をしながら一年半ほど経ったころ、彼女が

思いがけない提言をしたのだ。

「現時点での太陽エンジンの試作型を量産してはどうかと」

「馬鹿を言うな！コイツはまだまだ未完成なんだ！とても発表できるような、ましてや量産出来るようなものじゃ…」

「でも新エネルギーとしちゃ充分じゃないの？正直コレくらい出来れば充分実用可能な範囲だと思うんだけど？」

「そ…それ、は…」

東の意見は実の所まったくの的外れという訳では無かった。東が加わった事もあってか、既に町の二つや三つは充分賄える程の出力を実現していたのだ。

確かに当初の予定の「一国を一つで賄う」には到底及ばない。だが、このサイズでの動力源としては既に過剰と言っても良い。新エネルギーとしても充分誇って発表できる

レベルだろう。

「それにこれってエネルギー問題解決が目的なんでしょ？今は正にそれで問題になってるし、環境問題だって洒落にならない。世界中

が新しいエネルギーを血眼になって

探してる。……今が発表の時じゃないの？第一、今の調子じゃ一国の電気賄う程の出力なんて作ろうとしたらそれこそ完成する前に人類滅んじゃうんじゃない？」

「確かにそれは、一理ある…だが」

.....

.....

「平和の為に使うってんなら今が使うべきでしょうが！これで世界が救えるじゃない！！」

「！？お前…それは本気で言ってるのか？！お前が『世界』を…」
「二度は言わないわよ…でどうなの？量産するの？しないの？」

誰もが驚愕する。「あの」束が、『世界を救う』と言ったのだ。小さな世界に閉じこもり、他者など如何なっても良いと言っていた彼女が！

そう確かに彼女が言ったのだ。それも激情に身を任せて！！彼女が広い世界にその足を踏み出し、他者を慮れる立派な人間になったのだ！！

そう誰もが感じた。ならば、ここは彼女の意思を尊重すべきではないのか。確かに彼女のいう事も一理ある。幾ら開発が進んだと言っても

やっと町の二つ三つ程度なのだ。彼女の言うように今のままではそれこそ途方も無い時間がかかるだろう。それにこのような社会だからこそ、

新エネルギーの発表は世界の為になるのではなからうか！
そこに居た全員が思ったらしい。しばし眼を合わせ、代表として爺ちゃんが応える。喜色が滲み出ている声で

「そうじゃの。今こそこの研究が人の役に立つときじゃ！」

「そうね、やりましょう！量産を！輝かしい未来の為に！！」

「ああ、今こそがその時だ！」

自分達の研究が実る、そして親友の娘が更生できた。二重の喜びにり爺ちゃん達の土気は高まる。俺もまた嬉しかった。今ままで人を見向きもしなかった

幼馴染がやつと真人間に更生したのだ。たまらず自分の歳も忘れて束さんに抱きつく。それを彼女が受け止める。意外にスタイルの良いい彼女の双球に顔を埋め、人目も気にせず甘える。

「どうしたのいつくん？いつくんからハグしてくれるなんて嬉しいけど今日は甘えんぼさんだね。」

「束さん、今の言葉本当！？本当にホント！？」

「あつたり前じゃん！束さんがいつくんに嘘付いた事あつた？」

「……結構あるよ。結構」

「うぐツ！？ま、まあ今回はホントだって。ホントに本当！信じてお願い。」

「大丈夫！今回は信じたから」

「うれし〜い！！さすがいつくん！落としてから持ち上げるとは将来女泣かせかねえ？篝ちゃん泣かせちゃ駄目だよ？」

「な！？そ…そんな事は！？」

「ハイハイジョークだからそんなに真っ赤にならないで。可愛いなあもっ」

思いがけない事を言われて真っ赤になった俺を珍しく年上らしさを発揮した彼女があやし、頭を撫でている。

その光景を父さん達は温かい目で見守っていた。微笑ましい子供達の戯れを。

その日の内に束さんの発言は彼女の親にも伝わったらしく、諸手を挙げて喜んだとの事だった。

そして父さん達は、量産化の為の計画を立てた。士気が高かったせいか思いのほか作業はトントンの拍子に進み、遂に500個の先行量産型太陽エンジンが完成したのだ。

唯、量産といってもまだまだ複雑な部分が多く、非効率的であった。その為最初ももっと少なくても良いんじゃないかという話だったが、少しでも作ったほうが世の為に

なると熱心に主張する束の主張を受け、現段階で出来る最大の数としたのだ。そして後は最終調整をするだけである。

「おつとと…」

「わ！爺ちゃん大丈夫！？フラフラじゃん！？」

「いやスマンスマン。どうやら年甲斐もなくはしゃぎ過ぎたようだなあ。体が付いてこんかつたようじゃわい」

「父さん。歳なんだからもうちょっと自重しないと」

「そういう貴方も足腰来ているようだけど？」

「…母さんだつて人の事いえない見ただけど？」

完成という事で気が抜けたのか、爺ちゃん達は急激に疲れが襲ってきたようだった。グロッキー状態の三人を見てどうしたものかと思っっていると束さんが声をかける。

「いっくん、オジサマ達と先に帰ってあげて。その様子じゃこれ以上無理そうだし」

「え？でも束さんだつて疲れているんじゃない…」

「だいじょーぶ！束さんはピッチピチの十代だからね？若さで幾らでもカバー出来るよ！それに後は私の仕事だから任せてちょーだいい！」

「…なら、お願いするね。無理しちゃ駄目だよ。」

この時俺は完全に東を信用しきっていた。いや俺だけじゃない。この件に係わった人間全てが彼女が真人間になったものだと思ってる。わなかった。

だが、もしももう少し過去、気をつけていれば気づけたかもしれない。偶の外出の際に、未だ他人をゴミを見るような眼で見る奴に。

あるいはこの完成の一ヶ月ほど前、東が振りりとどこかへ出かけた姿に。

だが、先の言葉で浮かれていた俺達は完全に気づかなかった。東が、その本質が……

・

「……………そう、後は私の仕事。後はこれを使って世界を変えるだけ。私達の好きなように」

―かつてとまったく変わっていなかったと―

翌日は丁度学校が休みの日だったので、疲れを引き摺る爺ちゃん達を助けながら何とか研究所に入る。

だがそこで信じられない光景が目に入った。何故なら実験用に使っていた一基を残して、

つい昨日まで並んでいた量産型が全て

跡形も無く消えて居たのだから。

「な…これは一体!？」

「束は!？アイツはどこへ行った!？」

「あの子…盗んだというの!？でも一体なんの為に?!」

「束…さん…!？」

それぞれが驚きの声を上げる。無理もない。長年に渡る研究成果があっけなくも盗まれたのだ。

それも自分達に協力してくれたと思った少女に。驚愕に打ちのめされる俺達。だがそこに更なる劇的な情報が舞いこんで来たのだ。

「何者かにハッキングされて日本に向けて2341発のミサイルが打ち上げられた、と」

「ハッキングだと!？馬鹿なそんな事が出来る筈がない?!」

「まさか束さん!？どうしてこんな!？」

「いえ、そもそも不可能な筈よ!？いくらミサイルのシステムを掌握しようが、機械側に干渉は出来ない筈よ!」

大陸間用クラスなら安全装置の一つとしてワザとアナログ回路を仕込んで「物理的に」回路を繋がないようにしてる筈よ!」

母さんの驚きも無理はない。そもそも制御機構が組み込まれた装置には、万が一システムが完全にイカしても停止できるよう、

物理的に回路そのものを遮断し止めるように非常停止用のモノが組み込まれて居る。ならば逆に「非常時」しか使わないミサイルも

迂闊な事では発射しないような装置が組み込まれている筈である。例えハッキングしようが発射など不可能な筈だ。

ならば一体どうやってー

「！そうか、そういう事か!?!」

「爺ちゃん解ったの!?!」

「ああ!だが解らん!?!何故奴はそんな「臨時ニューズです!」
なッ!?!これは!?!」

「爺ちゃんどうし!?!なんだあれ!?!」

何かに爺ちゃんが気づいたらしい。だがそれに応える爺ちゃんの言葉を遮るように信じられない光景が飛び込んで来た。

「ご覧下さい!日本に向かって飛んできているミサイルが殆ど謎の人物によって、撃破されて居ます!あ、新しい情報が入りました!どうやらこの人物が纏っているのは

インフィニット・ストラトス、略称ISと呼ばれる篠ノ之 束博士が開発した宇宙開発を目的としたマルチスーツの様です!一ヶ月前、
極秘裏に

各国の軍事関係者に発表されて居たようですが、現行兵器を全て超える圧倒的なカタログスペックと彼女の年齢もあつて信じるものは皆無だつたようです。

更にこのISは女性にしか動かせないとの事もあつて評判は芳しくなかつたようです。

ですがご覧頂けたでしょうか!?!この圧倒的な戦闘力を!日本に降りかかるミサイルの大軍を次々撃破して行きます!!!」

ーそこには白く、奇妙な、そして余りに不恰好な機械の鎧を纏つた一人の女が大剣片手にミサイルの大軍を打ち落とす姿があつたー

「そうか!?!そうだったのか!?!ワシは!?!ワシはあ!?!?!?なんという

事を!!」

「爺ちゃんどうしたのしっかりして!？」

その光景を見て何かに気づいた爺ちゃんが狂ったように頭を掻き毟る。何事かとあわふためく俺にこちらも現状を理解したらしく絶望に打ちひしがれた両親が答える。悔恨の満ちた、酷く震える声で

「…一夏、ミサイルを撃つたのは束だ」

「!?!?でもさつき『物理的に』どうにかしないと無理だつて!」

「一夏：あの娘が此処に来て開発：いえ、発展させたのは何だったか覚えてる？」

「何つて…確か転送装置と物質のデータ化：!?!?ま、まさか!?!?」

「そう、あの娘はハッキングでシステムを乗っ取った後、転送とデータ化機能を利用して「物理的にも」ハッキング

したのよ…アレを世に知らしめるために…」

「…それだけじゃないぞ。」

「爺ちゃん!?!?もう大丈夫なの!?!?」

少しは落ち着いたらしい爺ちゃんの声が聞こえてくる。

「ああ、なんとなかの。一夏、ケリーの話は覚えているか?宇宙に夢見て散った、悲しき超人間を。」

「確か：サイボーグだよ。宇宙開発用の」

「おそらくISとかいうあの兵器の基礎構想はそれじゃ…機械を内蔵ではなく、外付けの強化服にするという手にして。

それならば寿命の問題は無くなるし、対象者の負担が大幅に軽くなる。

恐らく、四年前快諾したのは動力源が欲しかったんじゃない。あの兵器を動かす為に!」

「……多分、柳韻達があの時話してた研究してるモノがあれだった

んだろう。だが、俺達とは逆に奴は機械にそこまで詳しく無かった。……パワードスーツの癖に補助する筈の関節部分が丸出した。非効率にも程がある。それに今ニュースで流れているスペック、あれを実現するには強力な動力源が必要だ。非効率な仕組みで無駄に消費されるエネルギーと、超威力の武装を両立させるだけの出力が」

「あの娘、多分最初は超人間の動力システムを使おうとしたんじゃないかしら。当時の技術なら彼女でも再現可能な筈よ。でもそれじゃ足りなかった。」

そんな時に私達の話が来て渡りに船だったという事ね」

打ちひしがれた父さん達も説明に加わる。衝撃的過ぎる事実だが、確かに思い当たる節がある。あの時やけにあっさり快諾したのを疑っただけあつて

それは否応なしに現実味を帯びてくる。

「で、でも束さんは世界を救うって！？それに嘘じゃないって！」

「ええ、確かに彼女は救ったわ、彼女と……そしてあの娘の世界を」

「あの娘って……！？う……嘘だよ……ね？母さん？だって、そんな」

「残念だが正解だ。束にとつての世界の一人……千冬に最強の力を与える為だ。だから嘘は言っていない。アイツの狭い世界を救う為にしたんだから」

頭が真っ白になる。あの時、交わした言葉は偽りだったのだ。いや、ある意味では偽りよりも酷いだろう。彼女にとってはあれは正に真実なのだから

「すまん・・・すまん！！許してくれ鉄人！！・・・そして父さん！！
この馬鹿な兄弟を！！息子を！！」

「・・・わしは、わしは！！取り返しの付かない事を！！行つては成らない大罪を犯してしまった！！なんと、なんとこの事を！！」

「あの娘は、千冬間違はなく世界最強になつたわ・・・代わりに世界は滅茶苦茶になるだろうけど。」

「あんなものが女しか仕えないからな。・・・態々そんな設定までしたんだ。情報操作もして世界を狂わすだろうさ。」

「ええ、束達にとって都合の良い世界にね・・・」

鉄人と父の名を叫び、絶望に満ちてあの世へと己の罪を懺悔する祖父。もう一度兄弟に会いたいが為に、そして平和利用を願って作られた夢が踏みにじられ

己の行いに悔やみ、むせびなく祖父。いつも自分に夢を語り、それが叶う日を楽しみにしていた祖父。もう一度兄弟に会わんと開発に生涯をかけた祖父。

そんな祖父を泣かせたのは、誰だ？

両親を見る。まるで呆けたかのように虚ろな眼をした両親を。祖父、彼にとつての父の夢に協賛し、ともに歩んで来た夢を、汚された彼を。父の背中を見て育ち

その背中に憧れ同じ夢を追いかけた彼を。いつも忙しい中、自分達と触れ合う時間を必ず作ってくれた父を。

そしてその父に惹かれ、こちらにも彼と家庭を支える傍ら、いつも元

気に溢れていた母を。自分達を腹を痛めて産んでくれた母を。

そんな両親を絶望させたのは、誰だ？

ケリー。戦争の無い世界を求めて超人間にまでなり、最後は宇宙に散った悲しき男。そんな彼が静かに眠るであろう広大な宇宙。

それを玩具で汚したのは、誰だ？

「…ッない」

戦争。多くの人が意味も無く死んでいった地獄。いや、人だけではない。無関係の動物たちまで猛獣という事で奪われていった戦争。自分が大好きな象が、その強靱な肉体と賢さゆえ、楽に死ぬことも出来ず、餓えて死んでいった戦争を。

多くの咎人を生み出したあの忌まわしき行為を

それを省みず、再び起すかもしれない行動をしてるのは、誰だ？

地球。多くの人が暮らすこの星。人類だけでなく、数多の生命を育む母なる大地。最高の命であるこの青い地球。誰のものでもない地球

そんな地球をズタズタにしようとしているのは、誰だ？

空に浮かぶ女を見る。自らの力を誇示したいが故に世界をかき回す彼女を。恐らくは自分との約束を守った親友からコアに関しては知らなくても、

普段の行いからそれが親友の仕業と気づいている女を。それに気づきながら何も批判しない彼女を

あれは、一体誰だ？

「…さない」

親友の姉を思う。世界を救つと嘯き、祖父と両親の夢を踏みにじつた彼女を。狭い世界に閉じこもつた彼女を。そしてその世界を守る為に、多くの人々の世界を破壊しつくさんとする彼女を。

奴は一体誰だ？

誰だ？

誰だ！ダレダ！！

誰だ！！ダレダ！？誰だ！！！！誰だああ！！！！！！

そんなもの、決まっている

「許さない…許さない！！許してたまるか！！！！！！」

あれは唯の……

「篠ノ之 束！！そして…織斑千冬！！」

憎むべき敵だ。自分の愛する者達の夢を踏みにじつた仇だ！世界を我が物にせんとする悪だ！！

あまりの怒りに身体が震える。怒りの炎で全身が焼き尽くされていくような錯覚を起す。だが止まらない。怒りはなおも高まっていく血液が丸で沸騰しているようだ。怒りが収まらない。

そんな時だった。 - - ゴゴゴゴゴゴゴ！ - -

地響きがする。絶望に打ちひしがれた彼らがわが子を案じて正気に戻ると、そこには今まで見たこと無いほど凄まじい出力を叩き出している太陽エンジンがあった。

「な…これは!？」

「これなら、当初の予定だった出力…いやそれ以上も夢じゃない!」

「じゃが、何故今になって!？まさかあの子の怒りに反応したのか!？」

研究者としての心、そして夢への道が確かとなった事に先ほどの絶望も忘れて驚愕する彼等。

その時、不意に太陽エンジンの上に人影が移った。いや、それは人影と言うには余りに巨大であった。

だがそれを見た一夏は理解した。彼こそが自分がかつて遊びたいとおもった彼だと。祖父が生涯をかけてまで会いたかった兄弟なのだと。

そして伝わってきた。彼が自分と同じように、いや、それ以上に怒りに震えている事に。

そして、かつて祖父と約束した大きな事。図らずもその願いが思いも寄らぬ形で果たせそうだという事に。

「鉄人！鉄人28号！！お前も、お前も怒っているんだな！兄弟を泣かせた奴等を！！叩き潰したいんだな、奴等が作る歪んだ世界を！！！！」

その答えにまた影も咆哮を持って答える。自分も同じだと。奴等を決して許しはしないと。

後に一夏は語る。この日、織斑一夏は死んだと。千冬の弟たる彼は死んだと。そして生まれた日だと。憎き敵を叩き潰す事を誓った金田一夏の生まれた日だと

パンドラの箱は開け放たれ、世界に絶望が満ちた。だが、中にはたった一つだけ希望が残されていた。世界の絶望を叩き潰す為希望の光は光る。

——希望と言うには余りに禍々しい程の輝きで——

第三話 裏切りとパンドラの箱（後書き）

どうも思ってたより一夏の怒りが軽くなってしまったように感じます。

上手く皆様方に伝わってくれると良いんですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7330y/>

蘇る戦争の亡霊

2011年11月28日01時01分発行